

金の鈴

—— 作品概要

永井芙佐子

(上)

主人公静夫は出産直後に、母親を亡くす。父親は困りはて産院にたのんで母乳を与えてくれる人をさがしてもらおう。大きい葉屋の嫁で出産時に男児を死なせた安江を紹介される。安江の乳房は腫れ痛みだし熱まででてくるほどであったが、静夫に飲ませると痛みも消え、日に日に静夫が可愛くなり、死んだ子の産れ変わりやと思ひ出し、返したくなくなり、夫にたのみ養子にする。上に娘が三人、お産はもう無理だと医師に言われている。静夫は可愛いがられ、姉達の中ですくすくと育つ。小学校で、まま子と言われたと安江に告げると、「まんまんちゃんに

もろたから、まま子といひますねんで」と仏壇の前で言ってきた。養父は評判の美男であるが、長い廊下でつながった大きな離れで、祖父祖母と生活し、あまり子供達が暮らす母屋には来ない。中学生になると、次々子供達は個室を与えられる。末っ子の静夫にもその時が来た。廊下に養父が六畳の部屋を造らせ、椅子式の机を買ってくれた。新中学校の制服を母と買いに行き、部屋にかけて眠ったその深夜、突然口をふさがれ養父に暴行を受ける。養母には言えないことだと直感でわかる。一人で耐え無口になり笑わなくなった。養母は静夫でも中学生になったら、物思いにふけるようになるもんやと明るく言う。

長女の弥生が同じ大学の葉科の先輩の

子を妊娠し、すぐに結婚となる。相手が婿養子になつてくれたので養父達は大喜びする。その上男児の孫が産まれた。父は婿を可愛がり、魚釣りにつれて行き、高価な釣竿を何本も買い与える。静夫は庭つづきの姉達の新宅へ行き、自分はつれていつてもくれず、たのんでいるのに釣竿を一本も買ってくれない養父に怒り、深夜忍び込んできた養父を強く拒絶する、そのとたん、養父は激怒し、「親の言うこときけんやつは、出て行け。実家に返す、明日や」次の朝、養子仲人を呼びつけ送らせた。

大阪の実家は小さい葉屋であった。実父は美男だつた養父にくらべ貧相である。兄と兄嫁がいた。実母が暮らしていた部屋に通され、机の上の影の薄い実母の写真を見て、自分の母だとすぐにわかつた。公立中学に転入したが、父は小遣いもくれない。学級委員の丸山に、「一緒に新聞配達せえへんか」と誘われ、親友となつた。高校も同じだったが、父から、大学は葉科に行けと言われ、葉屋は不景気に強いと進められる。丸山は工学部に

進む。

薬料を卒業し、父の縁故で大規模な薬屋に就職するが、職場がおもしろくなく、流感にかかり休んでいる間に、働く気が失い、朝起きられなくなる。そんな日が一ヶ月近く続いた朝、父に布団をめぐられ「働かんやつは、出て行け」と言われる。無気力のまま浮浪者のたむろする公園に来ていた。老人に声をかけられその人の小さい小屋で暮らしはじめる。その夏、公園で暴動が起こり、その中で石を袋につめて売っている男がいた。それを見て、商売おもしろそうやと気が戻り、商売がしたいと家に帰り、頭を下げて父に頼む。父はそれなら信用をつけるためにも結婚せえと、見合いを進める。建設会社の重役の花子と会う。花子は小柄で可愛らしく肌がきれいであった。そこを静夫は化粧品を売るにはピッタリだと気に入る。父は花子の手がたいへん荒れているところが気に入る、結婚となる。花子は実母を亡くし、継母にいじめられて育ち、二人とも義理の親にひどい目にあつた者同士だと静夫は花子を愛しく想

う。

(下)

静夫が家出している間に、父が物色してくれていた、住宅付店舗をローンで買入し、薬と化粧品の店を開業した。花子は商売を面白がり嬉嬉として働き、店は軌道にのり始める。結婚してはじめての花子の誕生日に、桃色のサイフを買い、18金の小さい鈴をすすめられ付けてもらう。花子に手渡すとトイレにかけこみ号泣し、誕生祝いをしてもらうのは初めてと言う。小さい金の鈴の音が、亡母の仏壇の御鈴の音とそっくりだと喜ぶ。花子は妊娠し女兒が生まれる。産声か鈴の音のようにきれいだつたので、美鈴と名付けた。父は初孫をよろこび、子のない兄嫁と子守をしてくれる。小さいころから字も教えた父のおかげだろうか、美鈴は勉強がよくできた。不景気が始まり、隣りの本屋が店を売りに出したので買い取り、店を少し広げた。

美鈴は高校の卒業が近くなると、カナダに留学したいと言いだす。静夫は反対するが、花子は賛成で、カナダに留学してしまえば静夫を落胆させる。静夫は淋しさをまぎらわすためもあり、毎夜飲みに出かけるようになるが、学費をかせぐためにも、商売に精を出す。

隣りの呉服屋が倒産。安く買うことができ店を拡張する。薬屋は不景気に強いと父が言ったとおりになつたが、花子の商売上手も大きく、地区の商工会の女性役員もさせられている。静夫は一生懸命働き、帰ってくる美鈴のために、部屋をピンクの壁紙にして待った。帰国する直前に、美鈴から国際電話がかかりカナダで結婚すると、びつくりするようなことを言い出し、婚約者を連れて帰つてきた。華僑の宝石商の息子である。美鈴は宝石商になりたいのと言い、花子はいつでもカナダに行けると喜んだ。娘達はすぐにカナダに帰つてしまふ。静夫は淋しさと虚しさで毎晩深酒をするようになる。朝方まで飲み、昼まで寝て昼すぎから店に立つ。顔色が悪くなりだし、よく嘔吐

するようになり血がまじるようになった。花子は病院に行きましようとしきりに進めるが、元来の医者嫌い注射嫌いである。薬だけは飲むがよくならない。そのうち、花子には隠しているが吐血するようになった。それでも毎晩、居酒屋とスナックをはしご酒し、ふらふらになつて朝方帰宅するが、花子はぐつすり眠っている。ある日、店に出ようとすると、花子から病院に行つてくれないのなら、店に出なくていいと言われ、ショックを受ける。顔色が悪すぎることを客に言われているのである。その上瘦せてきている。それから昼下りに起きていつものコーヒー店に行き、新聞を読み、夕方から飲みに出かける。花子は静夫の淋しさがわかるので、何も言わない。言つてもきかないこともわかつている。

ある日、いつものコーヒー店に一人の青年が入つてきていた。その美青年がコーヒーを運んできた時、首のホクロを見て触つてしまいそうになつた。慌てて手をひっこめるが動揺する。一瞬で、恋に落ちたのである。もちろん片思いである

が、はじめて恋心を知つた。それからは寝てもさめても、その美青年のことばかりを想い、店に一日三回も通い、ただ見ているだけで良かった。それから恋の歌が好きになり、スナックのママが歌う恋の歌にしびれ泣きそうになり、はじめての恋に酔い浮き浮きと身体も軽く、日々をおくつた。花子は静夫の機嫌が悪いのでたすかっている。が下血まではじまり、それでも恋の力なのか疲れはあまり感じない。浮き浮きとした日が一年近く過ぎたある日、いつものようにコーヒー店に行つたが青年がいない。無愛想な店主に聞くと、北海道へ帰つたと言う。時計台の見える所らしいと聞き、行きたくなつた。丸山も札幌に左遷させられて長い、会いたくなり、花子に帰つたら必ず病院に行くと約束して出かける。時計台の見えるレストランや喫茶店に入り、

来るはずのない恋人を待つように時を過ぎす。不思議に甘い幸福な満足感の中で二日が過ぎる。がホテルの部屋では吐血下血をする。三日目丸山に会う。丸山は静夫のあまりの変容にぎよつとして、病

院にいつてるかと聞く。札幌の丸山にもいろいろあつた。二人は懐かしさの中で話をし、時を過ぎ、次の日飛行場まで送つてくれた。丸山は「長生きしような」と手を振る。大阪に着き、花子に携帯電話をする。「今、着いた。もうちょっと旅をしたいから」と言つたときに携帯のバッテリーが切れる。そのあと、ホームレスの集まる公園に行き、安宿に泊りぐつすり眠る。深夜めざましで公園のベンチに腰をかけた。やわらかい雨が降り始める。養母を思い出し、てるてる坊主の歌をうたいながら。